

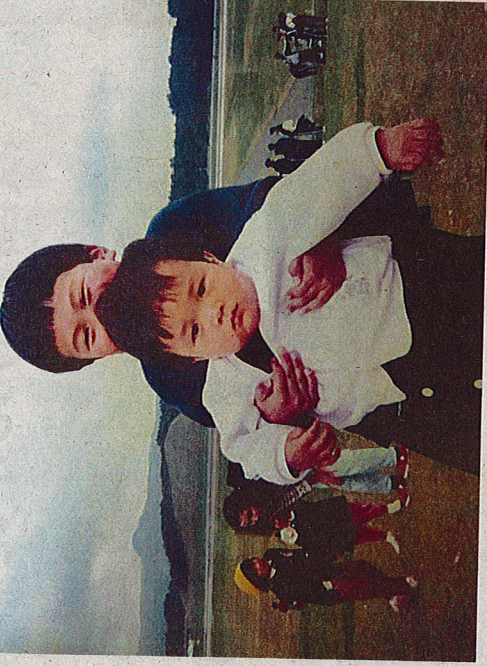
# だるま

それは普通ではなかった。  
大学で知り合った仲のいい友達に「だるま欲しい?」と聞くと「いらない」という返事が。知名度の低さ、家にだるまがある人の少なからず伝統産業であるだるまの衰退を肌で感じた。

約300年の歴史がある白河だるま総本舗の次男として生まれた。毎年2月に白河市で「白河だるま市」が開かれるなど、多くの人に愛される白河だるま。生まれた時から白河だるまが身近な存在で、自分のアイデンティティーの一つになるのは自然なことだ。

幼少期から体が大きく、父守栄の勧めで小学4年生から野球を始め、小中高と野球漬けの日々を送っていた。野球のほか、陸上やバスケットなどでも運動センスが光り、体を動かすことが自分に合っていると思っていた。また、兄直之の存在もあり「家業を継ぐのは兄で、自分ではない」と、将来の夢は体を動かすことができる高校の体育の先生だった。

小学生のころから、あだ名は「だるま」だった。



白河だるま総本舗の次男として生まれた私(手前)。白河だるまは身近な存在で、自分のアイデンティティーになっていた

## 白河だるま総本舗14代 渡辺 高章 (28)

1

(28)

高章

約300年の歴史がある白河だるま総本舗の次男として生まれた。毎年2月に白河市で「白河だるま市」が開かれるなど、多くの人に愛される白河だるま。生まれた時から白河だるまが身近な存在で、自分のアイデンティティーの一つになるのは自然なことだ。

幼少期から体が大きく、父守栄の勧めで小学4年生から野球を始め、小中高と野球漬けの日々を送っていた。野球のほか、陸上やバスケットなどでも運動センスが光り、体を動かすことが自分に合っていると思っていた。また、兄直之の存在もあり「家業を継ぐのは兄で、自分ではない」と、将来の夢は体を動かすことができる高校の体育の先生だった。

体育の教員免許を取るため、東京の大学に進学した。全国から人が集まる中、白河だるまのことを知ってる人の少なさに驚いた。今までだるまに囲まれる生活を送り、自分自身もだるまと呼ばれる環境で過ごしていたが、

# マイストーリー

## 斎藤さん

# 弱者支える 事務所開設

会津若松市の会津土地建物顧問の斎藤斗志郎さん(47)が、貸事務所を自費で改装した「さくら事務所」が26日、同市上町の博労町通り沿いに開所した。入り口から車椅子のまま利用できる多目的トイレがあり、斎藤さんは「暮らしが

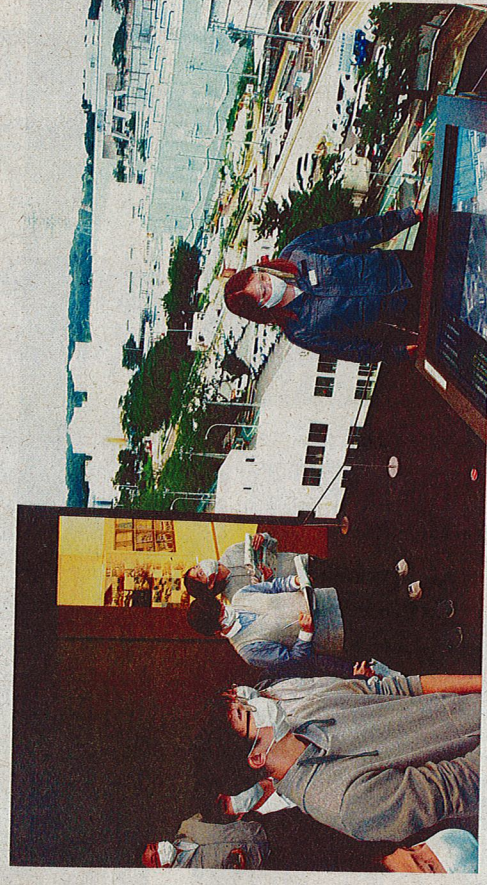
## 資料相談

の台も設置した。同日の開所セレモニーには、大石さんも出席し「かつては障害者用トイレも、『バリアフリー』という言葉すらなかった。いつかこんな日が来ようとは夢にも思わなかった」と感慨を語った。

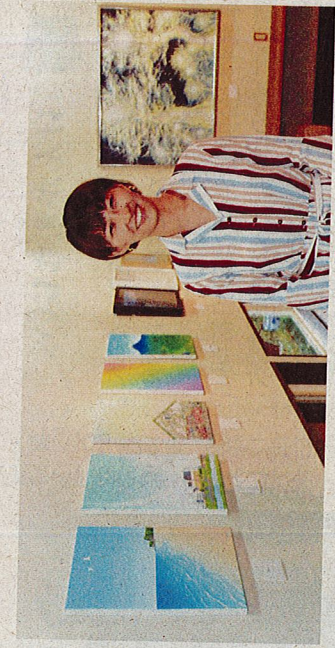
郡山市の安積高の生徒が27日、双葉郡内を視察した。東日本大震災、東京電力福島第一原発事故から9年半が過ぎた被災地の現状と本県の復興に向けた課題を見つめた。1、3年生24人が参加。震災当時は幼かった生徒たちに震災と原発事故の記憶を伝える、風化の防止や復興につながる力を身に付けてもらおうと企画した。

## 安積高校生、双葉郡内を視察

廃炉資料館で原発の現状に理解を深める生徒



# 復興へ課題見つめる



来場を呼び掛ける金沢さん

いわき市勿来町生まれの画家・イラストレーター金沢裕子さん(35)の個展「わたしのそら」は26日、同市東ヶ丘のギャラリー「いわきで」が始まった。金沢さんは未来への希望などを表現している」と作品に込めた思いを話している。10月4日まで。金沢さんは東京都在住。筑波大学芸術専門学群総合造

# 未来への希望描く

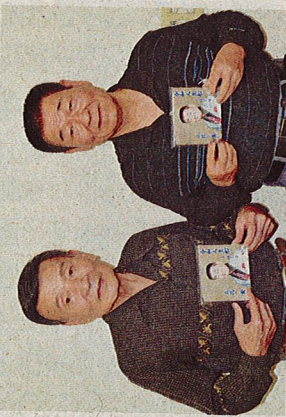
## いわき出身 金沢さんが個展

形専攻卒業。東日本大震災後は、故郷に向けてできることを考え、芸術で人々の心を癒やそうと作品を制作。空や鳥をテーマに、可能性やロマンなどについての思いを絵画に盛り込んでいる。今回は、同市の風景を描いた色彩豊かなアクリル画37点を展示。金沢さん

## 同世代への応援歌

矢吹・立花さんCD製作

矢吹町の歌手・立花薫(本名櫻村義男)さんは、同世代への応援歌としてシ



まだまだ元気に頑張りますよとエールを送る立花さん(右)と薫さん

## 同世代への応援歌

「講話を聞くだけではなく、実際に現地に足を運ぶからこそ被災の実態や復興の歩みの力強さを実感できた」と振り返った。1年の杉山匠磨さん(16)は「時が止まったままの過去と時計の針が動き出した今が混在していた。県外の人に福島状況をしっかりと伝えられる力を身に付けた」と目標を掲げた。

## 同世代への応援歌

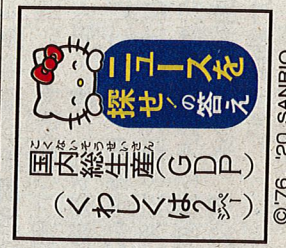
「講話を聞くだけではなく、実際に現地に足を運ぶからこそ被災の実態や復興の歩みの力強さを実感できた」と振り返った。1年の杉山匠磨さん(16)は「時が止まったままの過去と時計の針が動き出した今が混在していた。県外の人に福島状況をしっかりと伝えられる力を身に付けた」と目標を掲げた。

「テレワーク対応住宅と、郊外への暮らし替え。両立できます」



大和ハウス工業

大和ハウスグループの答え



©76、30 SANRIO APPR. NO. G604163